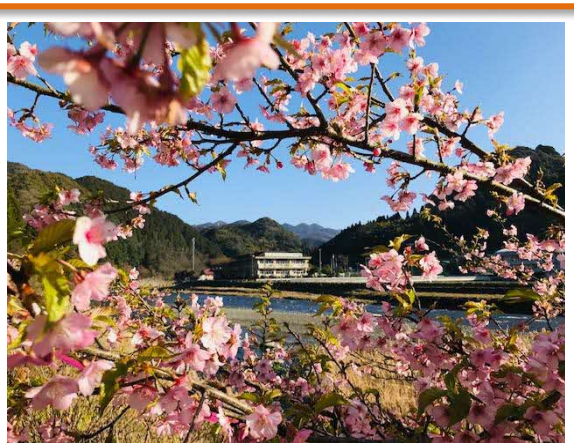
熊本県中山間農業モデル地区支援事業事例集

⑤万江地区（山江村）

次世代に繋ぐ万江の絆と農業の礎
～次代を担う子供たちに託すために～

ビジョン策定年度：平成29年度　目標年度：令和3年度



次世代に繋ぐ万江の絆と農業の礎　～次代を担う子供たちに託すために～

万江地区（山江村）

ビジョン策定年度：平成29年度　目標年度：令和3年度

1．モデル地区のプロフィールと現状

（平成29年度）

◆農業者に関する状況

・総戸数	226戸
・総人口	631人
・農家戸数	70戸
・農業者数	71人
・担い手数	4人
・65歳以上の農業者数	53人

◆農地に関する状況

（1）面積区分

・水田	27ha
・畑(樹園地除く)	26ha
・畑(樹園地)	12ha

（2）筆数

・水田	1,526筆
・畑（樹園地除く）	1,522筆
・畑(樹園地)	65筆

（3）作付区分

・水田	水稲
・畑(樹園地)	栗

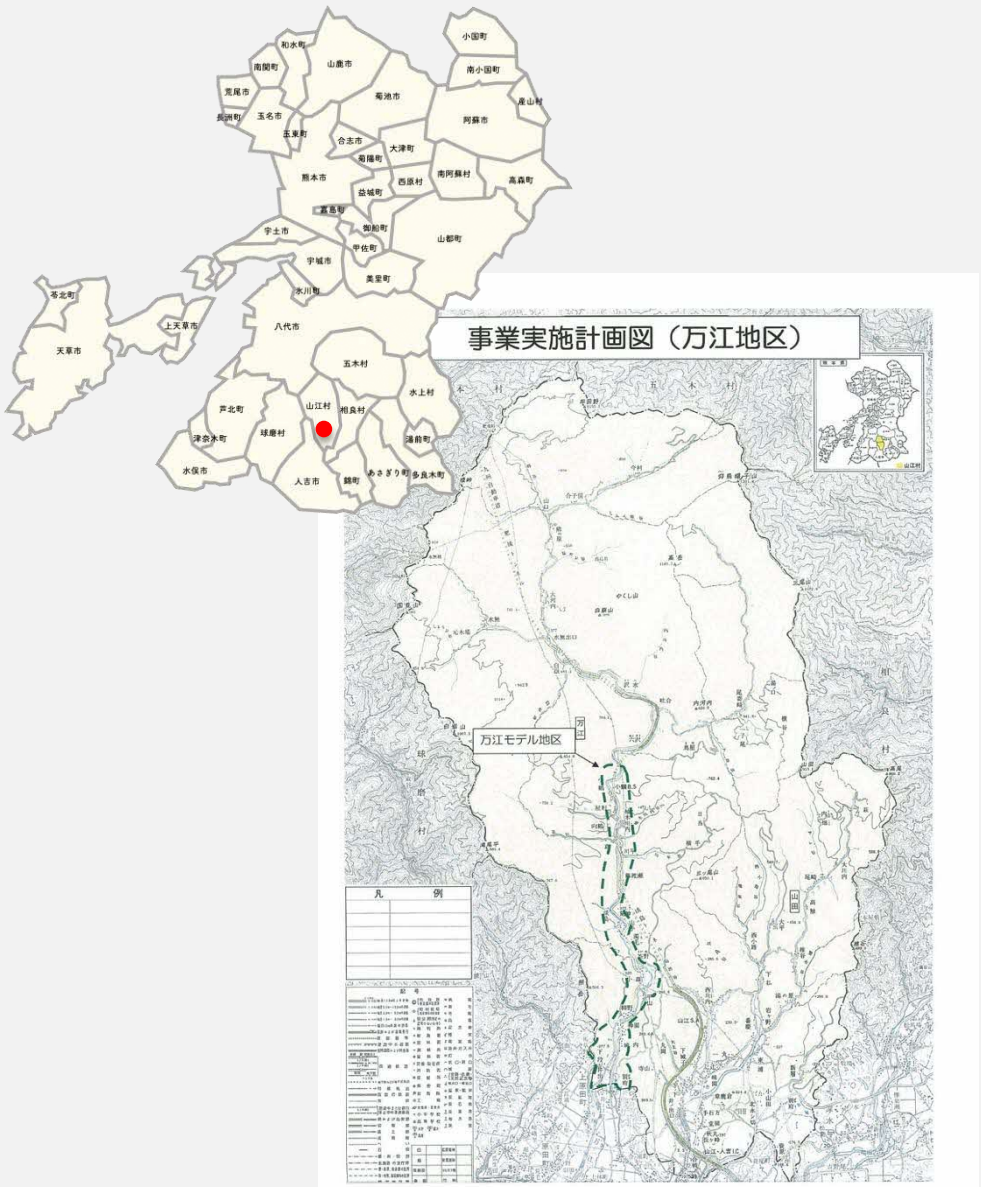
（4）耕作放棄地　あり

◆基盤整備に関する状況

（1）ほ場整備	27.8ha整備済
（2）耕作道路	舗装済
（3）排水	コンクリート水路
（4）用水	水路から直接取水

◆集落の現状

〇地域農家の6割が70歳代～80歳代。
〇水田では、水稲以外の作付がほぼない。
〇区画整理は整備済みであるが1区画は狭小であり、一部に区画整理がなされていないほ場がある。
〇他地域から入作が増加している。



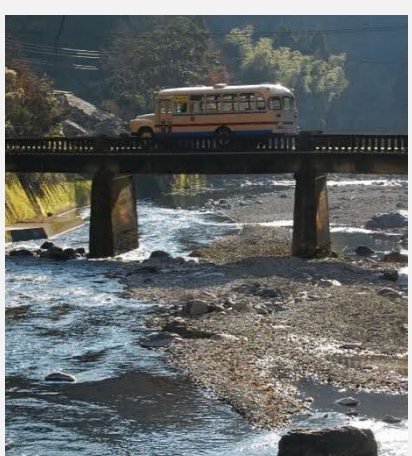
2. ビジョン策定のプロセス

（1）中山間農業モデル地区設定以前の状況

山江村万江地区は球磨川の支流である万江川沿いの集落である。美しい水に恵まれ、良質の米が育つ土地であるが、中山間の例にもれず、狭小な農地で農業の効率化が図れず、高齢化の進行、後継者の不足が著しい。住民は強い危機感を抱いていた。

そのような危機感から、平成28年頃から、村内8地区の代表者10名ほどで、毎月、検討会を行っていた。

当時、万江地区では水稲と栗の2種しか作付けておらず、すでにほとんどが兼業農家となっていた。集落と農業を維持していくために、農業活性化協議会を作るべきではないかというのが大きな議題となっていた。



（2）村長のリーダーシップによる未来マップ作成

山江村長である内山慶治氏の指示の下、山江村役場の産業振興課によって「10年後の地域マップ」が作成された。

地区内のすべての耕地について、「今、誰が耕作しているのか」「10年後は誰が管理しているのか」などを聴き取り調査し、現状と10年後を比較できるマップを作成した。

現在の耕作者が75歳なら10年後には誰も管理できなくなる。耕作放棄地は赤色に塗られたが、10年後の集落はほとんど真っ赤になった。法人化しなければ地域そのものが存続できない。住民の危機感は非常に高まった。

（3）農事組合法人「万江の里」の設立

集落において、法人化へ向けた検討が進められた。鹿児島や八代などへの先進地視察、県主催のセミナー受講などを経て、平成29年6月、農事組合法人「万江の里」が設立された。

農事組合法人
「万江の里」

（4）ビジョンの検討と合意形成

農事組合法人「万江の里」が設立された翌月、平成29年7月、県および山江村から中山間農業モデル地区支援事業の説明を受け、同年8月、モデル地区の設定が決まった。

事業説明からモデル地区設定までが迅速・スムーズに進行したのは、前述したように、すでに集落内において地域の課題が共通認識として形成されていたからだと思われる。

同年8月から9月にかけてビジョン案の検討が進められ、同年10月、農業ビジョンの作成に至った。

ビジョン案の検討会

◆モデル地区農業ビジョンの検討の流れ

番号	日付	場所	話し合いの内容	参加人数
1	H29.7.11	万江コミュニティセンター	県、村職員から事業内容や行っていくことについて、説明を受けた	10名
2	H29.7.21	万江コミュニティセンター	地域の現状や課題、具体的方策等について検討を行った。	5名
3	H29.8.22	万江コミュニティセンター	地域の現状や課題を確認し、将来像や具体的方策等について検討を行った。	8名
4	H29.9.5	万江コミュニティセンター	前回の検討を基に、ビジョン案を検討した。	5名
5	H29.9.12	万江コミュニティセンター	前回の検討を基に、ビジョン案を検討した。	8名
6	H29.9.29	万江コミュニティセンター	ビジョンの最終検討を行った。	9名

3. 集落の「課題」と「将来像」

◆集落の課題

○農業の担い手（後継者）がいない。
○農地の利用率が低い。
○耕作放棄地が増加している。
○過疎化が急速に進展している。

◆集落の目指す将来像

○農業で食べていける儲かる農業の実現。
○地域に農業の担い手がおり、活気ある農業の営み。
○地域の特産を活かした商品化。
○にぎやかな地域の実現。

◆成果目標

○タマネギの作付面積を70a増加させる。
○カボチャの作付面積を70a増加させる。
○学校給食に7品目以上納品する。

（1）課題認識に変化はあるか

◆解決に向けた進捗

若手後継者がいないことに変化はないので、まだ解決の目処は立ってはおらず、状況は変わっていないし、課題認識も同様である。

しかし、補助のおかげで今まで何も持っていなかった農業機械を地区に整備することができて、高齢化で農業をやめる人を食い止めることに貢献していることは確かである。

また、農事組合法人に任せてもらう土地がどんどん増えてきつつあり、耕作放棄地を増やさない役目は担えてきているのではないかと考えている。

◆新たな課題

上述したように、基本的には状況は変わっておらず、新たに生じた課題といったものは特にない。

（2）将来像に修正は必要か

現状では、ビジョンに変化はない。

4. 取り組み状況

［ビジョンの内容］

（1）所得の確保
◆地区内で高単価作物として、タマネギ、ホウレンソウ、カボチャ、ナス、ニガウリ、ショウガ等を試験的に導入し、収益が見込める作物は面積を拡大する。
◆栽培した野菜等は、学校給食へ納品するとともに、移動販売や物産館での販売を行う。
◆農産物の契約栽培を行う。
◆法人を核として、機械・施設の整理合理化を図り、無駄な投資を抑制する。
◆ICTを活用し、効率的な農作業を行う。
◆清流万江川流域で栽培した米として、ブランド化を図り、有利販売を目指す。
◆水稲の裏作に、試験的に麦を3ha導入し、水田の高度利用を行う。
◆農産加工に取り組む（カボチャ、クリ、漬物等）
◆竹林を整備し、たけのこ栽培を行う。
◆地区で栽培した酒米を原料とした日本酒を造る 。

（2）担い手の確保
◆法人での雇用を行い、担い手の確保・育成を行う。

（3）農地の基盤整備と集積
◆畔倒しを行い、区画の拡大を行う。
◆暗渠排水により水田の汎用化を図る。
◆法人へ農地を集積し、耕作放棄地の発生を防止する。

（4）都市との交流
◆栗園を整備し、観光農園を開設する。
◆地区内の保育園児、小学校生の農作業体験を行う。
◆農作業体験や収穫祭を開き、交流を行う。
◆企業からの研修を受け入れる。
◆地区にある宿泊施設に泊まってもらい、農業体験や川遊びをしてもらう。

［各項目の取り組み状況］

（1）所得の確保について

◆取り組みの状況と成果

◎高単価作物の試験苗として、平成30年度はカボチャ、夏秋ナス、タマネギ、ニガウリ、ショウガ、ピーマン、ズッキーニ、唐辛子、トマト等を導入。

ナス・ピーマン・ズッキーニで8aなので、一つのハウスは4aや2a程度。ホウレンソウは導入しなかった。令和元年度は新たにカボチャと、ナスを導入した。

多品種をやめた主因は人手不足。また、作業量が増えると人件費がかさむが、売上はそこまで伸びなかったため断念した。

◎タマネギについては平成30年度に作ってみたが不作で、また、当時タマネギの単価が安くて大変だったので、以降は作っていない。

◎米、大麦、ソバ、カボチャは面積を拡大。

米は、平成29年7月に県や山江村の職員から農業ビジョンの説明を受けた時、すでに田植え済みだったので、平成30年度からスタート。1.5haだった法人の水田が、令和元年度は2.5haに増え、令和2年度には4.5ha～5haくらいになる予定。

米だけだった田んぼには大麦を5ha植え、畑にも大麦、ソバ、カボチャ、ナスを1.5ha植えた。ナスは最初はハウス栽培だったが、露地栽培もやっている。

ソバの導入

次世代に繋ぐ万江の絆と農業の礎　～次代を担う子供たちに託すために～

万江地区（山江村）

ビジョン策定年度：平成29年度　目標年度：令和3年度

◎高単価の野菜は、初年度は多品種を学校給食へ納品した。今は米3トンを安定供給している。あと、カボチャを少量だが給食に出している。

◎農産物の契約栽培は、まだやっていない。

◎清流万江川流域で栽培した米としてブランド化を図り、有利販売を目指す計画だが、今のところはブランド米まで至っていない。

◎水田の高度利用のために、水稲の裏作に試験的に麦を導入。3ha予定だが、今、3.5ha生育中。水田だけではなく畑も含め、蒔き付けてある。冬には何もなく寒々しい風景だったが、法人の田んぼには麦が植えてある状態。

冬、農事組合法人の田んぼだけに麦が植えてある

◎機械や設備は何もなかったが、県から万江地区農業活性協議会へ1500万円程の補助をしていただき、ほとんど揃えることができた。簡易ハウス設置、各種営農用機械（種まき機、移植機、溝切機、マニアスプレッダー、畔塗機、畔草払い機、アッパーローダー、井戸ポンプ、振動サブソイラー）を購入。
　関連事業にて、法人も250万円手出しして大型トラクターを買った。令和元年度の補助で、フレールモアは導入済み。コンバインは1300万円と高過ぎて買えないため、山江村機械利用組合に利用料を払って使わせてもらう。

◎購入前に、「農機は何を持っているか、何年目か、買い替えの意志はあるか」等アンケートを取った。個人所有だと20馬力のトラクターなどの小型が中心。古くなっても、高齢だと買い替えせず、壊れたら農業をやめてしまう。アンケートをもとに、必要な機械を選んだ。

◎ICTの活用に関して、ドローンを消毒などに利用する計画はあったが、買わずに予算を他に回した。法人のトラクターに設置するロータリー3種類を、県の補助で購入。

新たに購入した麦用播種機
（平成29年度）

新たに購入した田植機
（平成30年度）

次世代に繋ぐ万江の絆と農業の礎　～次代を担う子供たちに託すために～

万江地区（山江村）

ビジョン策定年度：平成29年度　目標年度：令和3年度

◎農産加工への取り組みは、栗、漬物等はまだ実施していない。カボチャペーストは、何度かみんなで試作してみた。カットしたカボチャをノンフライヤーで焼く実演販売をすると、令和元年11月の産業祭で売れた。試食した人の半分くらいが、カボチャを購入。村内の合戦嶺観音（かしのみねかんのう）で毎週日曜に開催される朝市では、お煮しめ用にカットされたカボチャから売れる。学校給食や、女性部長が勤務している施設の給食には丸ごと納品。個人用は4分の1程度にカットした方が売れるが、手が回らない。

◎カボチャの加工品のレシピも熊本大学の林田先生に考案していただき、プリン等を地域で披露したところ、幅広い年齢層に好評。

◎柿の木全体を法人で購入し、女性たちが剥いて干し柿を作った。しかし人件費を支払うと、労力に対して収益が上がらず、初年度で断念した。

◎たけのこ栽培は手付かず。竹林も荒れ放題だが、当事業で竹林を園地化すれば、たけのこが生えて来る。当分は販売用ではなく、自分たちが食べる分。山江村役場林政係で、福岡をターゲットに農林産物セット（干しシイタケ等）の販売を実験中。干したけのこを物産館で販売している人もいるので、竹林も整備すれば、特産品になり得る。

◎地区で栽培した酒米を原料にした日本酒造りは、未着手。個人では酒米のヤマダニシキを作っている人はいるが、法人では作っていない。

万江小学校
熊本大学の先生を招き、カボチャの授業

山江温泉でのカボチャ試食会

農事組合法人「万江の里」のカボチャは産業振興祭で2年連続金賞受賞

熊本大学・林田先生の指導でカボチャ調理試食会を開催

◆解決すべき課題

◎高単価作物の品種を増やすための人手や人件費が足りない。
◎カボチャプリン等を商品化するには加工所が必要。加工品を手掛けたいが、採算が合わない。
◎これまでも、田植え機や稲刈りには大型機械に委託し、水まきや草払いなど毎日の作業は自分で行っていた。しかし高齢化で、5年後はできなくなる人もいる。
◎消毒用ドローンを購入する余裕がなかった。

◆今後の方針

◎農産物の契約栽培を働きかける。
◎竹林を整備して干したけのこを商品化するより、今は、田んぼや畑を優先する。
◎令和2年3月完成予定の機械倉庫内に、加工所を設置するかもしれない。
◎酒米を栽培し、日本酒または焼酎を作りたい。
◎消費者から「玄米30kgは重い。5kgくらいがいい」と要望されたので、小袋での販売を計画中。

（2）担い手の確保について

◆取り組みの状況と成果

法人での雇用は、なかなかできない。若手は、専業農家の37歳男性が1名。若い人が来ても、法人でフルタイムの雇用は難しい。あとの組合員は50～60代で合計46人（43戸）。兼業農家で仕事があるので、作業に出て来られない。

◆解決すべき課題

「担い手数4人」と書かれているのは、認定農業者（人・農地プラン）のこと。高齢化で、息子さんも会社員などで、農業後継者がいない。若い人の就農を受け入れるためにも、売れる商品を増やしたい。

理事会と何度も話し合いを行ったが、時給750円以上は払うことができなかった。80代の女性などベテランなので、カボチャ磨きや選別の手際がすごくよい。初年度は5、6人で何日もかかったが、去年は2日で終了。上手な人ほど短時間で終わり、給料が安くなってしまう。

◆今後の方針

県最低賃金の時給790円は支払わないといけない。

（3）農地の基盤整備と集積について

◆取り組みの状況と成果

◎平成30年に畔倒しを行い、5a～13aが6枚あったのを、約35aが2枚にまとめた。区画拡大のおかげで、非常に効率がよくなった。アップカットロータリー、普通のロータリー、水田ロータリーを補助で購入したが、非常に良いものだった。

◎この付近は、ほ場整備をした30年前から2～3枚の高さが同じで、畔倒ししやすい。法人が高齢化で自分で耕作できない耕地を色々な農家さんから借りている。全部法人に頼ってくれると畔倒ししやすいが、現状は山江村外のタバコ農家に貸してある場所があるため、一緒にできない。

◎麦をつくるには、排水が重要。田んぼによって、排水不良で麦がつくれないところがある。水田の汎用化を目指して、暗渠を造る振動サブソイラーを購入した。

◎高齢化で耕作する人が減り、耕作放棄地になってしまっていた。そういう厳しい状況で法人が立ち上がり、借り賃1万円払って畑・田んぼにする。農地バンクにどんどん集まり、田んぼは5haに集積。耕作放棄地の発生を防止したが、それだけ、自力で農地を維持するのが難しい人がいたということ。

◆解決すべき課題

◎村外の農家に貸している農地があり、集積できない。
◎排水が悪く、麦が作れない水田がある。

◆今後の方針

◎畔倒しは有効。令和2年度も引き続き計画する。
◎令和2年の秋、米の収穫後に振動サブソイラーを使用して、暗渠を造る。排水をよくして、大麦を栽培する。

（4）都市との交流について

◆取り組みの状況と成果

◎栗園の整備と観光農園の開設は実施していない。栗に関しては、村から肥料も苗も買い、有害鳥獣避けの柵も作るなど、補助が厚い。そのため、各栗農家も一生懸命がんばっており、栗部会もたくさんある。法人では栗に着手するよりも他のことに取り組みたい。

◎地区内の保育園が田んぼを所有し、園児が田植え・稲刈り体験をしているが、そこに数人で手伝いに行っている。その田んぼで、小学生も農作業体験を行う。また、組合員が所有するサツマイモ畑を園児の芋掘りに提供。平成30年度には、カボチャに園児の名札を立てて、実ったら「MYカボチャ」として保護者に1個150～200円くらいで買ってもらいお持ち帰りいただく。

◎農作業体験や収穫祭を開き、交流を行う。
　産業振興祭は山江村主催。万江地区での収穫祭もしたい。農作業体験は、地元対象ではなく、交流人口を増やす意味でも観光客を対象とする。
　万江コミュニティセンターもあるが、今回の県の補助金で、農業倉庫を建築中。「山江温泉ほたる」の近くでもあり、ここを交流拠点として整備できるのではないかと考えている。

◎企業からの研修は、まだ受け入れていない。

◎地区の宿泊施設（ほたる亭）に泊まって、農業体験や川遊びをしてもらいたいが、まだ計画段階。目の前の作業で精一杯で、一度にはできない。

◆解決すべき課題

　法人で集まったり、加工商品をつくったり、都市部と交流したりする拠点の整備。

◆今後の方針

◎令和2年3月に建つ予定の農業倉庫（90㎡）を、30㎡×3に分け、交流拠点として整備したい。
◎企業からの研修も、受け入れる。
◎宿泊して、農業体験や川遊びをしてもらいたい。

5. まとめ：成果と今後の展開方向

◆成果目標

・タマネギの作付面積を70a増加させる。
・カボチャの作付面積を70a増加させる。
・学校給食に7品目以上納品する。

（1）全体的な成果

①タマネギはチャレンジしたが、不作と単価下落で休止に。

タマネギは平成30年度に作ってみたが、当時タマネギの単価が安くて大変だったので、以降は作っていない 。

②カボチャの作付面積は令和元年度に約1haへ。
評価も高く、今後の展開にも期待したい。

カボチャ作付け面積は、最初の時は広過ぎたので少なくした。平成30年は60a。令和元年度は2回収穫することにした。7月下旬に70a、11月上旬に25aで合計95a、約1ha。7月収穫分は加工カボチャで契約して100万円くらいになり、収益が出た。11月収穫の方はカボチャが安い時期だったが、予定よりも収益増にはなった。これからも年2回収穫する予定。

③学校給食は、法人としては2品目に集中。
但し、個人農家の納入も含めれば7品目を超える。

学校給食への納品は、令和元年度は米とカボチャの2品目だけ。米は全体で200袋くらい納品した。当初、タマネギなど7品目納める予定だったが、取り組んだ結果、収益や労働力の関係で、法人としては2品目に集中する。

物産館に集約し、そこから学校へ納めるが、万江地区全体では個人の農家が里芋、キャベツ、サツマイモなど、また組合員で自家栽培の野菜やシイタケを納品。それを含めると7品目以上ある。

（2）今後の展開方向

①稲作以外の作物導入の難しさ。
新たな作物の栽培技術の学びが求められる。

なかなか稲作から離れられない。慣れていない野菜は難しく、収入に結びつかない。

②補助金で作ったハウスをうまく活用できていない。
活用策の検討が急がれる。

補助金で作ったハウス3棟とも、何も栽培していない。今後の活動でハウスを活用して、高単価作物の導入を検討している。

③学校給食でも野菜の規格が求められる。
「売れる野菜」づくりの技術習得が必要。

給食も、規格外の物を受け入れてほしかったが、小さいと調理の時に手間がかかって使いづらいため、規格品を求められる。「普通にお店に出して売れる野菜をください」と言われた。売れる野菜を作る技術が必要になるとともに規格外の物の活用を検討していく必要がある。